

データでみる第12回マレーシア 総選挙結果の特徴と投票行動の変化

中村 正志 アジア経済研究所

はじめに

本稿の目的は、まず2008年総選挙結果の概要を示したうえで、下院選挙における与党の得票率の下落がいかなる投票行動の変化から生じたのかを推定することである。

まず、第1節で投票結果を概観する。第2節では、与党得票率の傾向の変化の原因を探るうえで有益な含意をもつ、与野党の得票構成に関するモデルを提示する。第3節では、この得票構成モデルを用いて今回の選挙でどのような投票行動の変化が生じていたのかを示す。

本稿の第1節は中村[2008]に、第2節は中村[近刊予定]に大きく依拠したものである。第3節における分析はフォーラム開催後に行った。その結果、フォーラム当日の筆者による発言と一部矛盾する内容を含む。具体的な箇所については、本稿の注8をご覧ください。本稿で示した見解が現時点での筆者の見解である。お詫びして訂正したい。

1. 選挙結果

(1) 下院選挙結果

最初に、下院選挙の結果をみてみよう。国民戦線の議席占有率は、改選前の90%から63%に急落した。この大幅な議席数の変化の要因として、第1に選挙制度の効果があげられる。マレーシアの選挙は、下院選挙、州議会選挙ともに小選挙区制で行われているため、死票が多く、得票率と議席占有率のギャップが大きい。また、得票率のわずかな変化が議席数の大きな変化をもたらす場合がある。2004年の前回選挙で国民戦線は得票率63.81%で議席の9割を獲得した。今回の得票率は51.50%で、前回選挙から12ポイント強の低下に留まっている(表1)。ただし、マ

レー半島部における与野党の得票率を比較すると、国民戦線は49.79%と半数を割り込んだ。一方、汎マレーシア・イスラーム党(PAS)、人民正義党(PKR)、民主行動党(DAP)の主要3野党の合計得票率は49.82%となり、わずかに国民戦線を上回った。

得票率と議席占有率のギャップの主要因は、ボルネオ島のサバ州、サラワク州の過大代表である¹。両州には、人口に対してマレー半島部各州より相対的に多くの議席が割り当てられている。国民戦線は、この2州で今回も完勝しており、両州の過大代表という状況に救われた格好だ。

与党連合加盟政党の成績をみると、ノン・マレー与党の退潮が目立つ。マレーシア華人協会(MCA)の獲得議席数は、前回の31から15へ半減した。マレーシア人民運動党(Gerakan)とマレーシア・インド人会議(MIC)は、それぞれ2議席と3議席しか獲得できないという壊滅的な敗北を喫した。MICについては、長らく公共事業大臣を務めてきたサミー・ヴェル総裁と、女性・家族・コミュニティ開発省副大臣だったパラニヴェル副総裁の双方が落選している。

アブドゥラ・アフマド・バダウィ首相率いる統一マレー人国民組織(UMNO)もまた苦戦し、当選率は67.5%に留まった。これは、過去最低だった1999年選挙の数値(69.2%)をも下回る。UMNO所属閣僚では、シャリザ・ジャリル女性・家族・コミュニティ開発相とザイヌディン・マイディン情報相が落選した。

¹ ただし、サバ、サラワクの過大代表が常に国民戦線にとって有利に働くわけではない。実際、サバの過大代表は1990年選挙では議席を減らす要因となっている。クランタンやトレンガヌも半島部西岸諸州に比べれば過大代表といえるが、これも国民戦線に有利に働くときもあれば不利に働くときもあった。ある地域の過大代表＝ゲリマンダリングとは即断できない。

表1 2008年マレーシア連邦議会下院選挙 政党別獲得議席数・得票率

(2008年3月8日投票、定数222、投票率¹ 76.0%。かっこ内は無投票獲得議席数)

	2008 年選挙			2004 年選挙		
	候補者数	獲得議席数	得票率(%)	候補者数	獲得議席数	得票率(%)
与党・国民戦線	222	140	51.50	219	198	63.81
統一マレー人国民組織(UMNO)	117	79(2)	29.99	117	109(9)	35.61
マレーシア華人協会(MCA)	40	15	10.90	40	31	15.40
マレーシア・インド人会議(MIC)	9	3	2.07	9	9	3.16
マレーシア人民運動(GERAKAN)	12	2	2.29	12	10	3.77
人民進歩党(PPP)	1	0	0.21	1	1	0.29
サバ統一党(PBS)	4	3(1)	0.56	4	4(1)	0.38
パソモモグン他統一組織 ² (UPKO)	4	4	0.74	4	4	0.78
サバ進歩党(SAPP)	2	2	0.39	2	2(1)	0.23
サバ人民統一党(PBRS)	1	1(1)	0.00	1	1	0.09
自民民主党(LDP)	1	1	0.10	1	0	0.12
サラワク統一ブミプトラ党(PBB)	14	14(3)	1.65	11	11(5)	1.15
サラワク統一人民党(SUPP)	7	6	1.50	7	6(1)	1.45
サラワク人民党(PRS)	6	6(2)	0.42	—	—	—
サラワク進歩民主党(SPDP)	4	4	0.66	4	4	0.72
サラワク・ダヤク党(PBDS)	—	—	—	6	6	0.66
野党・無所属	258	82	48.50	227	21	36.19
全マレーシア・イスラーム党(PAS)	67	23	14.61	84	7	15.25
人民正義党(PKR)	96	31	18.75	59	1	8.88
民主行動党(DAP)	47	28	13.95	44	12	9.93
サラワク国民党(SNAP)	4	0	0.11	7	0	0.41
その他野党	4	0	0.25	4	0	0.14
無所属	40	0	0.82	29	1	1.58
合計	480	222(9)	100.00	446	219(17)	100.00

1) 投票率 = (有効投票 + 無効票 + 回収されなかった投票用紙) / 有権者数。

2) 正式名称はパソモモグン・カダザンドゥスン・ムレット統一組織。

(出所) Election Commission Malaysia, *Report of the General Election Malaysia 2004*, Kuala Lumpur: Percetakan Nasional Malaysia Berhad, 2006; *New Straits Times*, March 10, 2008; マレーシア選挙委員会ウェブサイト (<http://www.spr.gov.my/>) などをもとに作成。

ノン・マレー政党が惨敗した結果、国民戦線所属議員の民族構成は大きく変わった。2004年選挙後の時点では、国民戦線所属下院議員のうち華人議員(サバ・サラワクを含む)の比率は20.7%、インド人議員の比率は4.5%であった。華人人口の比率は総人口の26.0%、インド人人口の比率は7.7% (2000年センサス)であり、とくにインド人の過小代表が目立つが、国民戦線所属下院議員の構成と人口構成に極端な乖離はなかった。ところが今回の選挙の結果、国民戦線における華人議員の比率は17.1%、インド人議員の比率は1.4%にまで落ち込んだ。これまでのように、国民戦線がすべての民族の利益を代表しているとは言いがたい状況である。

野党に目を移すと、マレー人政党のPASは獲得議席数が23、議席占有率10.4%となり、過去最高だった1999年選挙(議席数27、占有率14.0%)に次ぐ成績を収めた。1995年選挙以降低調だったノン・マレー

政党DAPも盛り返し、28議席を獲得した(占有率12.6%)。1990年代の高度成長期に失った華人有権者の支持を取り戻し、1980年代後半の勢力を回復したかたちとなった(86年選挙と90年選挙の占有率はそれぞれ13.6%、11.1%)。この2党以上に良好な成績を収めたのがPKRである。同党は、改選前は1議席を保持するに過ぎなかったが、今回31議席を獲得して野党第1党に躍り出た。野党各党にとっては、国民戦線の議席占有率を定数の3分の2以下に抑え込むことが長年の目標であった。今回の選挙では、PKRの躍進によってそれが実現した。

(2) PKRの「実質的指導者」と党の性格の変容

PKRは、2003年に国民正義党とマレーシア人民党(PRM)が合併して成立した政党である(ただし、PRMの一部党員は合併に反対しPRMを存続させた)。国民正義党は、1998年に解任、逮捕されたアンワー

表2 PKRの獲得議席数、候補者数の変遷（マレー半島部のみ。カッコ内は候補者数）

	1999 年選挙		2004 年選挙		2008 年選挙	
	下院	州議会	下院	州議会*	下院	州議会
マレー人	5 (37)	4 (63)	1 (34)	0 (69)	20 (47)	20 (84)
華人	0 (3)	0 (2)	0 (8)	0 (24)	7 (11)	15 (24)
インド人	0 (3)	0 (3)	0 (6)	0 (8)	4 (5)	5 (13)
計	5 (43)	4 (68)	1 (48)	0 (102)	31 (63)	40 (121)

* 2004年選挙の州議会議員候補1名については民族的属性がわからなかった。

（出所）表1 および図1 記載の資料にもとづき作成。

ル・イブラヒム元副首相の支持者らによって翌99年に設立された政党で、党首はアンワールの妻ワン・アジザ・ワン・イスマイルであった。PKR成立後も引き続きワン・アジザが党首を務めている。

しかし、現在PKRの実質的指導者は党顧問を務めるアンワール元副首相である。アンワールは、同性愛容疑（マレーシアでは刑法違反となる）で無罪判決をうけ2004年9月に釈放された。職権濫用容疑では有罪が確定していたが、同性愛容疑での拘留中に刑期を終えていた。釈放後アンワールはPKRの顧問に就任し、2007年5月の党首選挙に出馬する。ところが、政党やNGOの認可を司る団体登録局は、職権濫用罪の刑期満了から5年を経っていないことを理由にアンワールの党首選出馬を禁じた。党首選挙当日、アンワールは団体登録局とのトラブルを回避すべく立候補を取り下げ、党員に対してワン・アジザを支持するよう訴えた。その際、正式な党首はワン・アジザが務めるが、実際は自分が党を指導すると宣言した。このアンワール発言は喝采を浴び、ワン・アジザが無投票で党首に再選され、アンワールは実質的指導者の立場を得た。こうして今回の総選挙は、アンワール元副首相が野党指導者として臨んだ最初の選挙となった。

国民正義党は、発足当初から特定民族の利益にこだわらない（ノン・コミユナル）政党を標榜していたが、実質的にはマレー人政党の色彩が濃かった。1999年総選挙における同党の候補は、下院選挙では9割弱、州議会選挙では9割超に達していた（マレー半島部のみを対象とした比率。サラワク州の候補を含めると、プミプトラの比率はさらに高くなる）。しかし2004年選挙では華人候補とインド人候補が増え、下院選挙、州議会選挙ともにノン・マレー候補が3割を占めるようになった（表2）。今回の選挙で

は、下院選挙でノン・マレー候補が占める割合は少し下がって25%強、州議会選挙では前回同様に3割となっている。ところが今回の選挙は、これまでとは結果が大きく異なる。過去2回の選挙では、当選を果たしたノン・マレー候補はいなかった。しかし今回、PKRではノン・マレー候補がとりわけ高い当選率を達成し、下院では同党の当選者のうち3分の1、州議会では当選者の半数がノン・マレーとなった。所属議員の民族構成をみるかぎり、今回の選挙によってPKRは実際にノン・コミユナル政党になったといえる。このような政党の登場は、マレーシアの政党政治史上初めてのことである。

（3）州議会選挙結果

続いて州議会選挙の結果をみてみよう。国民戦線のノン・マレー政党は、下院選挙よりもさらに深刻な敗北を喫している（表3）。MCAは計31議席を獲得したが、うち20議席はマレー人有権者の比率が比較的高いパハン州とジョホール州で得ており、他の州では惨敗した。Gerakan候補は30人中3人しか勝てず、MICもジョホール州の他では不振を極めた。

国民戦線は、今回もクランタン州政権の奪還に失敗したのに加え、マレー半島西岸に位置するクダ州、ペナン州、ペラ州、スランゴール州でも過半数を獲得できなかった。これらの州では、PAS、PKR、DAPの3党が連立政権を打ち立てた。今回の選挙にあたり3党は共闘体制を組んでおり、選挙後は政党連合・人民連盟（Pakatan Rakyat）を旗揚げし連携強化に取り組んでいる。

クランタン州では引き続きPASのニック・アジズが州首相を務める。PASはクダ州でも16議席を獲得して第1党となり、同党所属のアジザン・アブドゥル・ラザクが州首相に就任した。ペナン州ではDAP

表3 州議会選挙結果（マレー半島部のみ。かつこ内は候補者数。）

表3-1 国民戦線加盟4党

州(定数)	国民戦線合計		UMNO		MCA		MIC		Gerakan	
	議席	得票率	議席	得票率	議席	得票率	議席	得票率	議席	得票率
ブルリス州 (15)	14(15)	61.50	12(13)	54.02	2(2)	7.48	0(0)	0.00	0(0)	0.00
クダ州 ¹ (36)	14(36)	47.42	12(28)	38.24	1(4)	4.16	0(2)	1.82	1(2)	2.70
クランタン州 (45)	6(44)	43.62	6(43)	42.33	0(1)	1.28	0(0)	0.00	0(0)	0.00
トレンガヌ州 (32)	24(32)	55.03	23(31)	53.23	1(1)	1.79	0(0)	0.00	0(0)	0.00
ペナン州 (40)	11(40)	40.96	11(15)	17.30	0(10)	9.23	0(2)	1.30	0(13)	13.13
ペラ州 ² (59)	28(59)	47.35	27(34)	28.88	1(16)	11.65	0(4)	2.87	0(4)	3.27
パハン州 (42)	37(42)	57.38	29(31)	43.07	6(8)	11.04	1(1)	0.73	1(2)	2.54
スランゴール州 (56)	20(56)	43.83	18(35)	30.60	2(14)	9.62	0(3)	1.88	0(4)	1.88
ヌグリ・スンビラン州	21(36)	53.31	19(22)	37.55	1(10)	11.48	1(2)	2.30	0(2)	1.98
マラッカ州 (28)	23(28)	56.89	18(18)	35.77	4(8)	16.03	1(1)	2.07	0(1)	3.03
ジョホール州 (56)	50(56)	63.06	32(34)	37.86	13(16)	18.68	4(4)	4.46	1(2)	2.07
半島部合計 (445)	248(444)	50.39	207(304)	35.62	31(90)	9.73	7(19)	2.06	3(30)	2.89

表3-2 人民連盟加盟3党

州(定数)	人民協約合計		PAS		PKR		DAP	
	議席	得票率	議席	得票率	議席	得票率	議席	得票率
ブルリス州 (15)	1(15)	36.83	1(12)	31.24	0(3)	5.59	0(0)	0.00
クダ州 ¹ (36)	21(36)	50.42	16(24)	36.78	4(10)	12.54	1(2)	1.10
クランタン州 (45)	39(45)	56.36	38(40)	52.50	1(5)	3.86	0(0)	0.00
トレンガヌ州 (32)	8(32)	44.97	8(27)	39.66	0(5)	5.31	0(0)	0.00
ペナン州 (40)	29(40)	58.90	1(5)	6.23	9(16)	20.42	19(19)	32.25
ペラ州 (59)	31(59)	52.46	6(21)	16.04	7(20)	14.08	18(18)	22.34
パハン州 (42)	4(42)	40.74	2(22)	21.72	0(13)	11.21	2(7)	7.82
スランゴール州 (56)	36(55)	55.98	8(20)	18.63	15(20)	20.20	13(15)	17.15
ヌグリ・スンビラン州 (36)	15(36)	46.68	1(13)	12.68	4(12)	13.00	10(11)	20.95
マラッカ州 (28)	5(28)	43.11	0(13)	14.10	0(7)	7.06	5(8)	21.95
ジョホール州 (56)	6(55)	35.77	2(33)	17.21	0(10)	5.94	4(12)	12.63
半島部合計 (445)	195(443)	48.97	83(230)	23.42	40(121)	12.08	72(92)	13.47

1) クダ州議会とパハン州議会選挙では無所属候補が1議席獲得。

2) ペラ州議会選挙の「国民戦線合計」は、人民進歩党（PPP）候補1名を含む。

(出所) The Star Online (<http://thestar.com.my/election/results/results.html>); *New Straits Times*, March 10, 2008; マレーシア選挙委員会ウェブサイト (<http://www.spr.gov.my/>) などをもとに作成。

表4 PAS候補, PKR (Keadilan) 候補がUMNO候補を破って獲得した議席の数(マレー半島部のみ¹)

	1999年選挙				2004年選挙				2008年選挙			
	PAS ³		Keadilan		PAS ⁴		Keadilan		PAS ⁵		PKR ⁶	
	下院	州議会	下院	州議会	下院	州議会	下院	州議会	下院	州議会	下院	州議会
ブルリス州	0	3	0	0	0	1	0	0	0	1	0	0
クダ州	8	12	0	0	1	5	0	0	6	16	4	0
クランタン州	10	40	3	0	6	24	0	0	9	37	3	1
トレンガヌ州	7	27	1	0	0	4	0	0	1	8	0	0
ペナン州	0	1	1	1	0	1	1	0	0	1	3	3
ペラ州	2	3	0	1	0	0	0	0	2	5	1	2
パハン州	0	6	0	1	0	0	0	0	0	2	1	0
スランゴール州	0	3	0	1	0	0	0	0	3	8	3	9
連邦領 ²	0	—	0	—	0	—	0	—	1	—	1	—
ヌグリ・スンビラ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	2
マラッカ州	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ジョホール州	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	0	0
合計	27	95	5	4	7	35	1	0	22	81	16	17

1) サバ州ではPAS候補, PKR (Keadilan) 候補がUMNO候補を破った事例はない。またUMNOは、サラワク州では候補を立てていない。

2) 1999年選挙はクアラルンプールのみ。2004年選挙, 2008年選挙はブラジャヤを含む。

3) クランタン州議会, トレンガヌ州議会, スランゴール州議会の選挙でPAS候補がMCA候補を破った事例あり(各1)。

4) ジョホール州議会選挙において無投票で1議席獲得。

5) 下院選挙(スランゴール州)とペラ州議会選挙でPAS候補がMIC候補を破った事例あり(各1)。クランタン州議会選挙では無投票で1議席獲得。

6) ペナン州議会選挙でUMNO候補を破ったPKR候補のうち1人は華人。

(出所) Election Commission Malaysia, *Report of the General Election Malaysia 1999*, Kuala Lumpur: Percetakan Nasional Malaysia Berhad, 2002; Election Commission Malaysia, *Report of the General Election Malaysia 2004*, Kuala Lumpur: Percetakan Nasional Malaysia Berhad, 2006; *New Straits Times*, Dec 1, 1999; March 23, 2004; March 10, 2008; マレーシア選挙委員会ウェブサイト (<http://www.spr.gov.my/>) などをもとに作成。

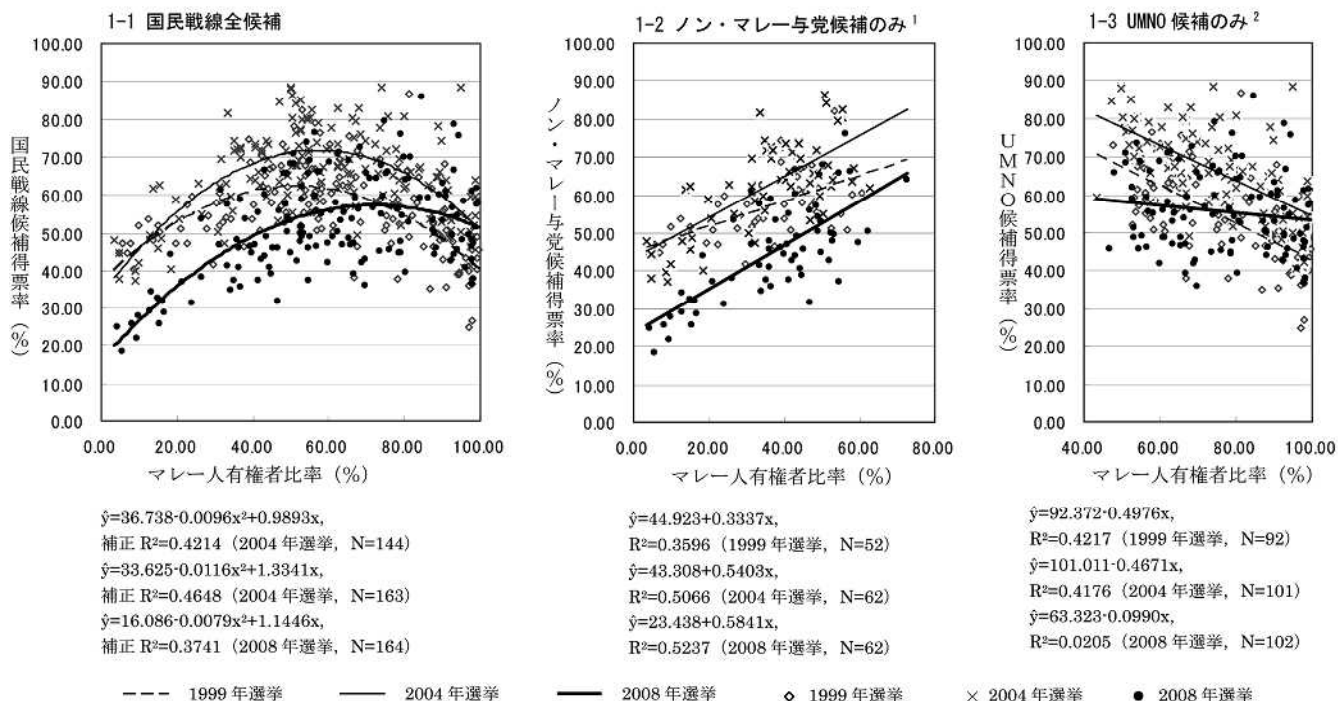


図1 下院選挙の国民戦線候補得票率(y)と選挙区のマレー人有権者比率(x)の関係の変化
(1999年～2008年。マレー半島部のみ。)

1) 1999年選挙はMCA, MIC, Gerakanの候補。2004年選挙, 2008年選挙はPPP候補を含む。

2) UMNO候補のみ, 2008年選挙の回帰式における, マレー人有権者比率(x)の回帰係数は10%有意水準を満たさない。その他の回帰係数はすべて1%水準で統計的に有意。すべてOLSによる推計。

(出所) 表1記載の資料および, Election Commission Malaysia, *Report of the General Election Malaysia 1999*, Kuala Lumpur: Percetakan Nasional Malaysia, 2002; *New Straits Times*, Dec. 1, 1999; March 24, 2004などをもとに作成。

が半数近くの議席を獲得し、同党のリム・ガンエン書記長が州首相に就任した。ペラ州ではUMNOが引き続き第1党となったが、MCAの惨敗によって政権交代が実現した。PAS、PKR、DAPのうちもっとも多く議席を獲得したのは、華人が主体のDAPである。ところがスルタンを擁する州においては、州首相はマレー人でなければならないと州憲法で規定されているため、DAPから州首相を出すことはできない。3党間の協議の結果、PASのモハメド・ニザール・ジャマルディンが州首相に就任した。スランゴール州ではPKRが15議席を獲得し、同党のカリド・イブラヒムが州首相になった。ただしペラ州同様、議会第1党はUMNOである。

2. 民族混合選挙区での与党優位はなぜ生じるか

(1) 過去3回の選挙における傾向の変化

以上の選挙結果から、今回の国民戦線の歴史的敗北は、華人、インド人有権者の与党離れによるところが大きいと推測できる。果たして、この推測は妥当だろうか。マレー半島部における国民戦線候補の

得票率と選挙区の民族構成との関係(図1)をみると、確かに投票行動のパターンに大きな変化があったことが確認できる。

過去3回の下院選挙について、国民戦線の全候補の得票率と選挙区のマレー人有権者比率との関係を表す回帰曲線をみると、1999年選挙と2004年選挙についてはマレー人有権者比率が50%台のポイントを頂点とする逆U字型になっている。国民戦線は、マレー人有権者ばかりの選挙区や華人・インド人有権者ばかりの選挙区より、民族混合選挙区で相対的に高い得票率を得ているのである。このような傾向は、1959年の第1回総選挙から続いていた(中村[2006])。ところが今回の選挙結果を表す曲線は、ほぼ右肩上がりの軌道を描いている。

ノン・マレー与党候補の得票率とUMNO候補の得票率を分けたうえで3回の選挙の間の傾向の変化をみると、次のようなことがわかる。まずノン・マレー与党候補の得票率についてみると、1999年選挙と2004年選挙では回帰線の切片はほぼ同一で傾きが大きくなった。次に2004年選挙と今回の選挙を比べる

と、傾きはほぼ同一だが切片が大きく下がっている。同様に、UMNO候補の得票率とマレー人有権者比率の関係を見ると、1999年選挙の回帰線と2004年選挙のそれを比べれば、傾きはほぼ同一で切片が上がった。次いで2004年選挙と今回の選挙を比べると、マレー人有権者比率が100%のポイントにおけるUMNO候補の得票率はほぼ同一だが、傾きが緩くなりほぼ平坦になっている。今回の選挙では、UMNO候補得票率とマレー人有権者比率の間に統計的に有意な相関はみられない。

これらの変化は、いったい何を意味しているのだろうか。それをある程度厳密なかたちで知るには、まず、これまでなぜ民族混合選挙区で与党が相対的に良好な成績を得てきたのかを検討しなければならない。

(2) 民族混合選挙区の与党優位に関する3つの仮説

人はさまざまな理由によって、誰に、あるいはどの政党に投票するかを決める。ただし当然のことながら、有権者は誰にでも好き勝手に投票できるわけではない。候補者という限られた選択肢のなかから選択する。よって選択肢のもつ属性の差異が有権者の投票行動を決定すると考えられる。

候補者間にはさまざまな属性の差異がある。与党候補か野党候補かという政治的立場の差異や、政策的争点に対する見解の差異に加え、女性か男性か、イスラーム教徒かキリスト教徒かといった集団的属性の差異や、年齢、清廉なイメージの有無、見栄えの良し悪しといった個人的属性の差異がある。

多民族国家のマレーシアにおける主要政党は、与野党を問わず特定の民族の利益を代表する民族政党である。民族の差にこだわらない(non-communal)ことを標榜する政党も独立以前から現在まで継続的に存在するが、どの政党も幹部の構成と政策志向に民族的な偏りがある。そのため表向きの主張にかかわらず、実質的にはノン・マレー(華人とインド人)の政党かマレー人政党のいずれかであると見なされてきた。

このことを有権者の立場から見れば、民族的利益にかかわる政策志向の差異が、選挙で有権者に与えられる選択肢の主要な差異のひとつになっていると

いえる。したがって、民族的亀裂にもとづく亀裂投票が重要な投票行動パターンだと推察できる。

以下では、マレーシアにおける投票行動を、(1)亀裂投票、(2)非亀裂投票与党支持、(3)非亀裂投票野党支持、の3種類に類型化したうえで、これらの投票行動がいかなる選挙結果をもたらすかを考察する。本稿において亀裂投票とは、自身の民族的選好にもっとも適う選択肢に投票するという投票行動を指す。有権者の関心事が、宗教であれ教育であれ、あるいは経済や福祉であれ、それが「〇〇人の利益」と意識される限り、その意識にもとづく投票行動はすべて亀裂投票とする。

非亀裂投票与党支持とは、亀裂投票以外で与党に投票するものすべてを指す。具体的には、良好なマクロ経済運営や選挙区への利益誘導を肯定的に評価して与党候補を支持する投票行動などが考えられる。一方、非亀裂投票野党支持とは、亀裂投票以外で野党に投票するものすべてを指す。具体的には、野党のイデオロギー(社会民主主義など)への支持や清廉なイメージを評価する投票、与党の失政に対する懲罰としての野党への投票などが考えられる。

亀裂投票は、容易には変化しない社会構造から発生する投票行動である。したがって、亀裂投票を行う有権者の比率が高ければ選挙結果になんらかの長期的傾向をもたらすはずである。

マレーシアの下院選挙は、小選挙区制(first-past-the-post system)のもとで行われており、与党連合はつねにすべての選挙区で統一候補を擁立してきた。マレー半島部では、特定の民族が有権者の大多数を占める選挙区より民族混合選挙区で与党が高い得票率を得ていることが早くから指摘されており(Ratnam and Milne [1967])、それは今日まで続いている(中村[2006])。この民族混合選挙区における長期的な与党優位は、これまで3つの理由で説明されてきた。この現象にもっとも早く着目したRatnam and Milne [1967: 372-3]は、民族混合地域の有権者は特定の民族だけが集まって居住している地域の有権者よりも穏健な民族意識をもち、これが与党に有利に作用すると主張した(以下、これを選好差異説と呼ぶ)。一方Crouch [1982]やHorowitz [1989]は与党連合加盟政党間の選挙協力の効果を強調する(動

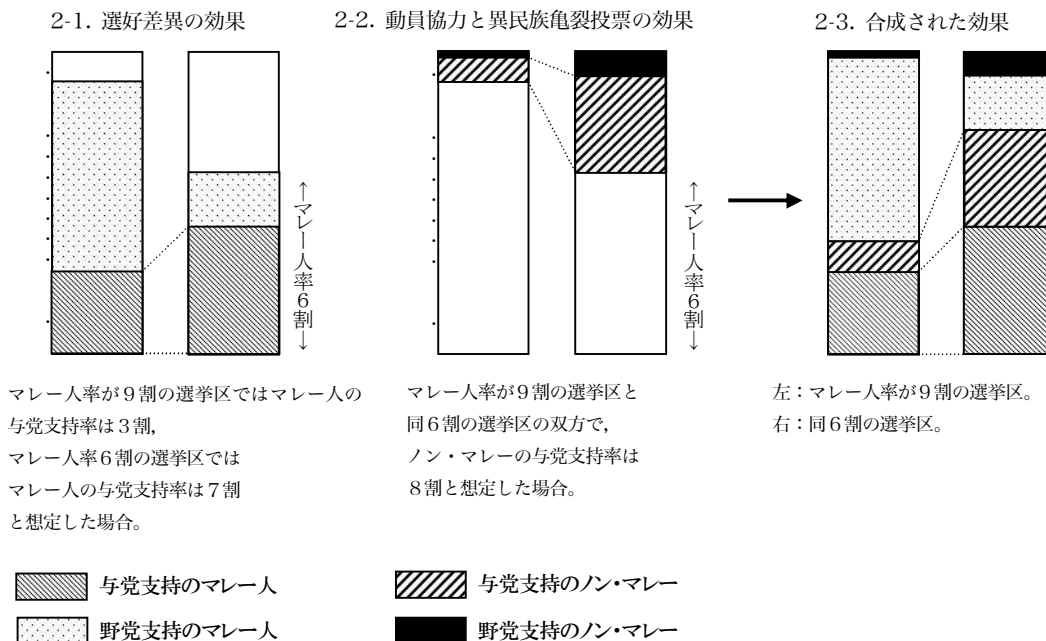


図2 3つの仮説が主張する効果（マレー人と野党間競合の場合）

員協力説）。もう一つの説は、自民族政党への投票という選択肢をもたない有権者による亀裂投票に焦点を当てた中村 [2006] や Balasubramaniam [2006] である（異民族亀裂投票効果説）。

3つの仮説はいずれも、民族利益の追求という点で野党が与党より相対的に急進的な立場をとっているという認識を前提としている。この前提のうえで、選好差異説にしたがえば、特定の民族が集中している地域では亀裂投票の多くは野党に向かい、民族混合地域では亀裂投票の多くが与党に向かうか、亀裂投票を行う有権者の割合が下がると考えられる。動員協力説は、選挙協力を行う与党連合加盟政党による組織票の交換の効果を強調する説である。ノン・マレー与党の候補はマレー人と党UMNOが組織を通じて動員するマレー人票を得ることができ、逆にUMNO候補はノン・マレー与党の組織的なサポートを得られる。与党連合加盟政党間で選挙協力が可能になるのは各党の政策的立場が比較的近いからであり、互いに急進的な立場をとる野党間では協力関係の構築・維持は難しい。異民族亀裂投票効果説は、これから詳しく見るように、選挙区における政党間競合のパターン、すなわちいかなる選択肢が有権者に提供されるかが亀裂投票の行方に強い影響を与え、その結果民族混合選挙区で与党が優位にあると主張する。

この3つの仮説と、前述した投票行動の3類型（亀裂投票／非亀裂投票と与党支持／非亀裂投票野党支持）との関係を確認しておこう。選好差異説は、与党候補と同じ民族の有権者の亀裂投票に着目したものである。たとえばマレー人と党UMNOの得票率については、マレー人ばかりの地域のマレー人有権者は急進的な民族意識をもっており、民族混合地域のマレー人有権者はより穏健な民族意識をもつがゆえに、マレー人有権者のうちUMNOに投票する人の割合は民族混合地域で相対的に高くなると考える（図2-1）。一方、動員協力説と異民族亀裂投票効果説は、ともに与党候補とは異なる民族の有権者に着目し、与党候補は彼らから得票しやすいと主張する（図2-2）。同じくUMNOの得票率を例にとると、動員協力説は、ノン・マレー政党が組織的動員を行い支持者にUMNO候補に投票させる効果を指摘する。地縁などの人的ネットワークを通じた動員によるこの投票行動は、候補者とは異なる民族の有権者による非亀裂型与党支持の一種といえる。異民族亀裂投票効果説は文字通り亀裂投票の効果に着目したもので、華人やインド人の有権者が自身の民族的選好に従って、野党候補より相対的に好ましいUMNO候補に投票すると主張する。

3つの仮説の妥当性は、これまで比較検討されてこなかった。そもそも、選好差異説と動員協力説に

については実証研究がほとんどなされていない²。その背景には、有権者の政治、社会意識や投票行動に関するサーベイ・データが不足しているという状況がある。理論上は、3つの仮説は相互排他的な関係にあらず、選好差異と動員協力、異民族亀裂投票効果のすべてが民族混合選挙区での与党優位に寄与している可能性がある(図2-3)。

そこで本稿では、同一民族政党間競合(UMNOとPASの競合やMCAとDAPの競合)となった場合に、民族混合選挙区における与党優位は選好差異のみから生じるのではなく、自民族代表への投票という選択肢をもたない有権者の投票の効果もあると考えられることを示す。

まず本節では、選好差異説が指摘する効果はないと仮定したうえで、同一民族政党間競合において、マレー人有権者の亀裂投票、非亀裂投票与党支持、非亀裂投票野党支持、およびノン・マレー有権者の亀裂投票、非亀裂投票与党支持、非亀裂投票野党支持がいかなる割合の場合に、民族混合選挙区で与党候補が相対的に優位になるのかを示すモデルを提示する。このモデルから、(1)自民族代表に投票できない有権者の存在が民族混合選挙区での与党優位に寄与しているか否かを判断する、(2)投票行動の変化の要因を推定する、の2点において有益な含意を引き出す。

(3) 政党システムと有権者の民族的選好に関する仮定

マレー半島部の主要民族は、マレー人、華人、インド人の3民族である。それぞれの民族の内部にも出自にもとづく集団的アイデンティティの差異があるといわれる。マレー人の場合、アラブ出身者や現在のインドネシアから移住した人々はそれぞれの集団的アイデンティティをもち、「生粋のマレー人」(Melayu Jati)の間でも出身州にもとづくアイデンティティがある(Mohd Aris [1983])。華人には、中国のどの地方の出身か、比較的早い時代に移民した海峽華人と呼ばれるグループか否か、英語教育を受けたか華語教育を受けたかなどの差異にもとづくアイ

デンティティがあるとされる(Lee and Tan eds. [2000]; 金子[2001])。インド人社会にも同様に、出身地にもとづくサブ・エスニシティがある(Sandu [1969]; 山田[2000])。

しかし、これらの「エスニック」な集団は、各自の利益を代表する政党をもたない。ジャワ人政党や広東人政党、セイロン出身者政党といったものは存在しない。自身の利益を代表する政党をもつエスニック集団としては、マレー人、華人、インド人という単位が最小の単位であり、それぞれの下位集団の利益は、政党政治においてはマレー人あるいは華人、インド人の利益として集約される。

与党側では、マレー人政党としてUMNO、華人政党としてMCA、インド人政党としてMICが存在する。また華人を中心に構成された「ノン・コミュナル」政党としてGerakanがある。

野党側では、独立前に結党され今日まで存続する有力マレー人野党としてPASがある。一方、少なくとも表向きには、華人やインド人の利益の追求を目的に掲げる有力野党は存在しなかった。かわって「ノン・コミュナル」政党を標榜しつつも、華人とインド人が幹部と党员、支持者の大半を占める実質上のノン・マレー政党がやはり独立以前から存在する。そのうちもっとも長期にわたり存続し強い組織力を誇るのが1966年に設立されたDAPである。

このような与野党の関係を、マレー人利益志向かノン・マレー利益志向かという尺度のうえに配置するなら、図3のようになると考えられる。民族的利益追求に関して相対的に穏健な立場をとる政党(政党Mと政党N)が与党連合を形成する一方、相対的に急進的な立場をとる政党(政党M'と政党N')が野党となっている。

選挙において民族的選好にもとづいて投票しようとする有権者は、これらの選択肢からの選択を強いられる。北部インド出身者という民族的アイデンティティを強くもち、その利益にもっとも適った候補に投票したい有権者がいたとしても、北部インド出身者の個別利益を代表する政党は存在しない。さらにそのような有権者には、インド人の利益を急進的に追求する政党という選択肢も存在しない。彼の選好にもっとも適う候補はノン・マレー野党の候補で

² 動員協力の内容については、Gerakan 所属のペナン州議会議員だったトー・キンウンの文献(Toh [2003])で彼自身のケースについて述べられているが、どの程度の集票効果があるかは明らかでない。

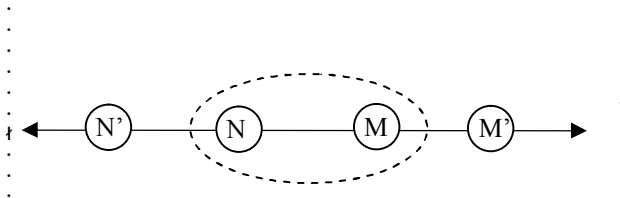


図3 民族利益追求の急進性を軸とした与野党の配置

(注) () の内側の政党が与党連合を形成している。
(出所) 筆者作成。

ある。こうした状況においては、マレー人か否かという亀裂が投票行動にもっとも広範な影響をおよぼす民族的亀裂だと考えられる。

本稿では、マレー人有権者はマレー人寄りの政策を好み、ノン・マレー有権者はノン・マレー寄りの政策を好むという民族的選好をもつと仮定する。選挙において与えられる選択肢である政党Mの候補(m)、政党M'の候補(m')、政党Nの候補(n)、政党N'の候補(n')が当選した場合に得られる効用を、それぞれ $u(m)$ 、 $u(m')$ 、 $u(n)$ 、 $u(n')$ とすれば、民族的選好の観点からは、すべてのマレー人有権者にとって、 $u(m') > u(m) > u(n) > u(n')$ が成り立つものとする。同様に民族的選好の観点からは、すべてのノン・マレー有権者にとって、 $u(n') > u(n) > u(m) > u(m')$ が成り立つものとする(仮定①)。

ただし、有権者は民族的選好にもとづいて投票するとは限らない、と想定する。

(4) 同一民族間競合における得票構成モデルとその含意

前述のように、マレーシアの下院選挙は小選挙区制のもとで行われている。与党連合は、第1回下院選挙から現在まで統一候補を擁立しており、加盟政党所属の候補どうしが競合した例はない。与党連合では、マレー人有権者が過半数の選挙区の大部分はUMNOに、ノン・マレー有権者が過半数の選挙区の大部分はMCAやMIC、Gerakanに割り当てられる。一方野党側も、マレー人政党はマレー人有権者が多い選挙区、ノン・マレー政党はノン・マレー有権者が多い選挙区を中心に候補者を立てる。その結果、同じ民族の利益を代表する政党どうしの競合となる選挙区が多い。

仮定①に従えば、マレー人与野党の2党間競合

(以下、MM'型競合と呼ぶ)になった場合、マレー人有権者にとって自身の民族的選好にもっとも近い候補はマレー人野党所属の候補m'である。ゆえに、あるマレー人有権者A氏は、民族的選好に従って候補m'に投票(亀裂投票)するかもしれない。しかしA氏は、選挙区への利益誘導を期待してマレー人与党に所属する候補mに投票するかもしれず(非亀裂投票与党支持)、あるいは不況を招いた政府への懲罰として候補m'に投票するかも知れない(非亀裂投票野党支持)。

一方この選挙区のノン・マレー有権者は、自身の民族的利益を代表する政党N'やNの候補には投票し得ず、候補mと候補m'のどちらかを選ぶしかない。その際、ノン・マレー有権者が民族的選好に従って投票するなら、候補m'はもっとも好ましくない選択肢であり、候補mが相対的に好ましい選択肢となる。したがってMM'型競合においては、亀裂投票を行うノン・マレー有権者が多ければ、マレー人有権者が大多数を占める選挙区より、ノン・マレー有権者の比率が高い選挙区の方が与党(政党M)に有利な選挙区となる。このような現象は、ノン・マレー与野党間の競合(NN'型競合)についても同様に生じる。すなわちNN'型競合においては、亀裂投票を行うマレー人が多い場合、ノン・マレー有権者が大多数を占める選挙区より、マレー人有権者の比率が高い選挙区の方が与党(政党N)に有利な選挙区となる。その結果、先ほど述べた与党連合内の選挙区配分(マレー人有権者が過半数の選挙区はマレー人政党に、ノン・マレー有権者が過半数の選挙区はノン・マレー政党に)と相まって、与党は特定の民族が大多数を占めるような選挙区よりも異民族からの亀裂投票を期待できる民族混合選挙区で優位にあると考えられる。

既存研究ではしばしば、ノン・マレー有権者はマレー人野党には投票せず、マレー人有権者はノン・マレー野党には投票しないということが自明の事柄として扱われている³。しかしもちろん、あるノン・

³ たとえば、2002年に行われた選挙区割りの変更についてクダ州を事例に分析したOng and Welsh [2005]は、民族混合選挙区が不自然に増えたと指摘し、これがUMNOの選挙での立場を強化した(PASの立場を弱くした)と主張する。

マレー有権者B氏が亀裂投票をおこなわず、なんらかの理由により候補 m' に投票（非亀裂投票野党支持）する可能性もある。そこで以下では、異民族野党に投票する有権者の存在を考慮にいたうえて、同一民族間競合における与野党の得票構成を示すモデルを提示し、異民族有権者の投票によって民族混合選挙区で与党が優位になる条件を考える。

マレー人有権者の全有効投票のうち亀裂投票が占める比率(%)を CV_M 、非亀裂投票与党支持の比率を NVg_M 、非亀裂投票野党支持の比率を NVo_M とする ($CV_M + NVg_M + NVo_M = 100$)。同様に、ノン・マレー有権者の亀裂投票比率(%)を CV_N 、非亀裂投票与党支持比率を NVg_N 、非亀裂投票野党支持比率を NVo_N とする ($CV_N + NVg_N + NVo_N = 100$)。選挙区のマレー人有権者比率(%)を x ($0 \leq x \leq 100$)、各党候補の得票率を $Y_{(i)}$ ($0 \leq Y_{(i)} \leq 100$) とする。全選挙区において、マレー人有権者の亀裂投票と非亀裂投票与党支持、非亀裂投票野党支持、およびノン・マレー有権者の亀裂投票と非亀裂投票与党支持、非亀裂投票野党支持のすべてが存在すると仮定する(仮定②)。

また、ある選挙において、政党間競合のパターンが同一の選挙区では、 CV_M と NVg_M 、 NVo_M の比率、ならびに CV_N と NVg_N 、 NVo_N の比率が同一だと仮定する(仮定③)。さらに、政党間競合のパターンが同一の選挙区では、棄権・無効票の比率は同一で民族間の差もないと仮定する(仮定④)。

仮定①と仮定③により、選好差異説が唱える効果はないと仮定したことになる。選好差異説は、ここでの定式化に従えば、(a)マレー人(またはノン・マレー)だけが居住する地域では、亀裂投票を行うマレー人(またはノン・マレー)有権者の多くは急進的で、彼らにとって $u(m') > u(m)$ (または $u(n') > u(n)$) であるのに対して、民族混合地域では穏健な有権者が多く、彼らの民族的選好からは $u(m) > u(m')$ (または $u(n) > u(n')$) となる、あるいは、(b)民族混合地域では相対的に多くの有権者が非亀裂型投票を行う、とする説だからである。仮定①によって(a)のような現象はないと仮定し、仮定③によって(b)の可能性を排

除したことになる。同時に仮定③によって、(c)マレー人(またはノン・マレー)の非亀裂型野党支持は、彼らだけが居住する地域では高くなり、民族混合地域では低くなる、という可能性も排除される。

現実には、選好差異説が主張するように上記の(a)や(b)のような現象は起こりうる。また、野党は自身の民族が集中的に居住している地域で民族混合地域よりも相対的に強い組織力をもち、地縁などによってより多くの票を動員できると考えられるから、上記(c)のような傾向も存在するだろう。しかしここでは、簡素化のために(a)、(b)、(c)の現象はないものと仮定したうえで与野党の得票構成のモデルをつくり、後に(a)、(b)、(c)の影響をコントロールしたうえで異民族有権者による投票の効果の有無を検討する。

仮定①、②、③、④により、マレー人と野党の2党間競合(MM'型競合)の場合、各選挙区における両党候補の得票率は以下ようになる(式の求め方は付録参照)。

$$Y_{(m')} = NVo_N + \frac{1}{100}(CV_M + NVg_M - NVo_N)x \quad \dots\dots\dots(1)$$

$$Y_{(m)} = 100 - NVo_N - \frac{1}{100}(CV_M + NVg_M - NVo_N)x \quad \dots\dots\dots(2)$$

一方、同じく仮定①、②、③、④により、ノン・マレーと野党の2党間競合(NN'型競合)の場合、各選挙区における両党候補の得票率は以下ようになる(式の求め方は付録参照)。

$$Y_{(n')} = CV_N + NVo_N - \frac{1}{100}(CV_N + NVg_N - NVo_N)x \quad \dots\dots\dots(3)$$

$$Y_{(n)} = 100 - CV_N - NVo_N + \frac{1}{100}(CV_N + NVg_N - NVo_N)x \quad \dots\dots\dots(4)$$

たとえば、MM'型競合において $CV_M=60$ 、 $NVg_M=20$ 、 $NVo_M=20$ 、 $CV_N=70$ 、 $NVg_N=20$ 、 $NVo_N=10$ 、となった場合、式(1)、(2)により、各選挙区における両党候補の得票率は以下ようになる(図4-1)。

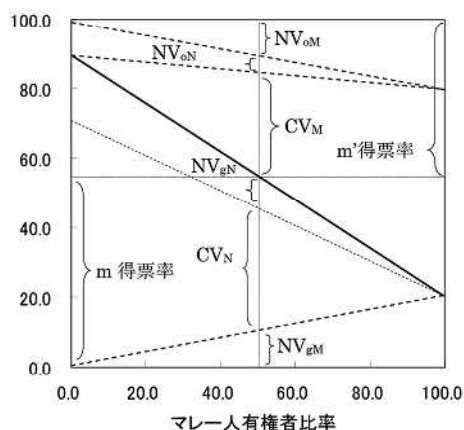
$$Y_{(m')} = 10 + \frac{7}{10}x$$

$$Y_{(m)} = 90 - \frac{7}{10}x$$

同様に、NN'型競合において $CV_M=70$ 、 $NVg_M=20$ 、 $NVo_M=10$ 、 $CV_N=60$ 、 $NVg_N=20$ 、 $NVo_N=20$ 、となった場合、式(3)、(4)により、各選挙区における両党候補の得票率は以下ようになる(図4-2)。

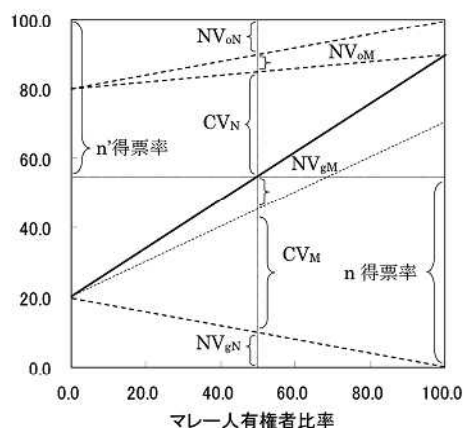
ところが、民族混合選挙区が増えると UMNO が有利になる理由についてはまったく説明せず、ノン・マレー有権者は PAS には投票しないという認識を前提に議論を進めている。

図 4-1 MM' 型競合 ($CV_M=60$, $NV_{gM}=20$, $NV_{oM}=20$, $CV_N=70$, $NV_{gN}=20$, $NV_{oN}=10$ の場合)



—— 候補 m 得票率 ($Y_{(m)} = 90 - \frac{7}{10}x$)

図 4-2 NN' 型競合 ($CV_N=60$, $NV_{gN}=20$, $NV_{oN}=20$, $CV_M=70$, $NV_{gM}=20$, $NV_{oM}=10$ の場合)



—— 候補 n 得票率 ($Y_{(n)} = 20 + \frac{7}{10}x$)

図 4 同一民族間競合における得票構成の例

(出所) 筆者作成。

$$Y_{(n')} = 80 - \frac{7}{10}x$$

$$Y_{(n)} = 20 + \frac{7}{10}x$$

MM'型競合とNN'型競合における与野党の得票構成モデルは、以下の含意をもつ。

(1) MM'型競合に関して、現象(a)、(b)、(c)の効果をコントロールしたうえで、なお与党候補得票率とマレー人有権者比率の間に負の相関を見いだせるなら、それはノン・マレー有権者の亀裂投票(与党に投じられる)と非亀裂投票与党支持によってもたらされたものと考えられる。

(2) NN'型競合に関して、現象(a)、(b)、(c)の効果をコントロールしたうえで、なお与党候補得票率とマレー人有権者比率の間に正の相関がみられるなら、それはマレー人有権者の亀裂投票(与党に投じられる)と非亀裂投票与党支持によってもたらされたものと考えられる。

またこの2つのモデルから、投票行動の変化の原因に関する含意を引き出すこともできる。たとえば、ノン・マレー与野党間(NN'型)競合に関して2度の選挙を比較したとき、現象(a)、(b)、(c)の効果をコントロールしたうえで、与党候補得票率とマレー人有権者比率の関係を表す直線の切片は同一で傾きが大きくなった場合、次のように考えることができる。

式(4)より、切片は $100 - CV_N - NV_{oN}$ である。切片が変化しないということは、ノン・マレー有権者の亀裂投票(野党に投じられる)と非亀裂型野党支持を合算した値($CV_N + NV_{oN}$)に変化がないということである。一方、傾きは $CV_N + NV_{oN} - NV_{oM}$ によって決まる。この値が大きくなり、かつ($CV_N + NV_{oN}$)が一定であるということは、傾きの増大がマレー人有権者の非亀裂型野党支持(NV_{oM})の減少によって生じたことを示している。

他にもさまざまな変化の原因に関する含意を2つの得票構成モデルから引き出すことができる。ただしそれは、現象(a)、(b)、(c)の効果をコントロールしたうえで成り立つものである。そこで次節では、現象(a)、(b)、(c)の効果をコントロールしつつ、今回の選挙と前回選挙について、与党候補得票率とマレー人有権者比率の関係をみる。そして、前回選挙からの変化の要因を、得票構成モデルを利用して解釈する。

3. 投票行動の変化の要因

(1) マレー人政党間競合における投票行動の検討

まず、マレー人政党間競合(MM'型)のケースから投票行動の検討に入る。前節で提示した得票構成モデルに従えば、前述した3つの現象の効果をコントロールしたうえで、なおマレー人有権者比率とUMNO候補の得票率の間に負の相関がみられるので

あれば、ノン・マレー有権者による亀裂投票(与党に向かう)と非亀裂型与党支持がUMNO候補の得票率を押し上げる効果をもつと考えられる。改めて書くと、3つの現象は次の通りである。(a)マレー人だけが居住する地域では、亀裂投票を行うマレー人有権者の多くは急進的で、彼らにとって $u(m') > u(m)$ であるのに対して、民族混合地域では穏健な有権者が多く、彼らの民族的選好からは $u(m) > u(m')$ となる。(b)マレー人の亀裂投票比率は、彼らだけが居住する地域では高くなり、民族混合地域では低くなる。(c)マレー人の非亀裂型野党支持比率は、彼らだけが居住する地域では高くなり、民族混合地域では低くなる。

上記(a)、(b)、(c)の現象は、いずれも住民のほとんどがマレー人ばかりの地域か否かの差異から生じる。この差は、選挙区のマレー人有権者比率とは必ずしも合致しない。というのも、民族混合地域のなかで局所的にマレー人有権者比率が高くなっているような選挙区も多数存在するからである。このような選挙区では、有権者の民族的選好や野党の組織力の点で隣接する民族混合選挙区と大きな乖離が生じるとは考えづらい。(a)、(b)、(c)は、広域にわたってマレー人ばかりが居住する地域とそれ以外の地域とを比べた場合にみられる現象であろう。

そこでまず、広域にわたりマレー人の人口比が高い地域か否かの差から生じる効果をコントロールし、かつ棄権・無効率(%)⁴がUMNO候補の得票率とマレー人有権者比率の双方に相関をもつ可能性を考慮したうえで、なおマレー人有権者比率とUMNO候補の得票率の間に負の相関がみられるか否かを、次のような回帰モデルにもとづき検証する。

推計①

$$Y_{(m)} = \beta_0 + \delta_0(\text{北部マレー4州}) + \beta_1(\text{マレー人有権者比率}) + \beta_2(\text{棄権・無効率}) + u$$

変数「北部マレー4州」は、マレー人の人口比が高いクランタン、トレンガヌ、プルリス、クダの4州の選挙区を1とし、その他の州の選挙区を0とするダミー変数である。この地域は「マレー・ベルト」とも呼ばれ、選挙区の大部分ではマレー人が有権者の80%以上を占める。このダミー変数によって、

住民のほとんどがマレー人ばかりの地域か否かの差異から生じる効果、すなわち上記の(a)、(b)、(c)の現象の効果をコントロールする。なお、 β_0 は定数項、 u は誤差項である。

変数「北部マレー4州」と「棄権・無効率」を導入してもなおコントロールできない仮定からの逸脱は、他の独立変数とは相関のない誤差とみなす。そのようなものとして、たとえば、UMNO候補の方がPAS候補よりもマレー人利益を急進的に追求していると認知する有権者の存在が考えられる。それがマレー人有権者ならUMNOの得票率を引き上げ、ノン・マレー有権者なら引き下げる効果をもつ。誤差は期待値ゼロで正規分布すると仮定する。

マレー人与野党間競合については、推計①だけでなく以下の回帰モデルでの推計も行う。

推計②

$$Y_{(m)} = \beta_0 + \delta_0(\text{北部マレー4州}) + \delta_1(PKR) + \beta_1(\text{マレー人有権者比率}) + \delta_2(\text{マレー比} \times PKR) + \beta_2(\text{棄権・無効率}) + u$$

第1節で述べたように、前回の2004年選挙から、PKRではノン・マレー候補が増えた。その結果有権者が、PASはUMNOより急進的だが、PKRはUMNOより穏健な立場をとっていると認識した可能性がある。そうだとすると、UMNOとPKRの競合となった選挙区では、ノン・マレー有権者の比率が上がるほどUMNO候補の得票率が下がる(マレー人有権者比率が上がるほどUMNO候補の得票率が上がる)ことになる。このような可能性に配慮し、推計②では、変数「PKR」と変数「マレー比×PKR」を追加した。変数「PKR」は、野党候補がPAS候補の場合を0、PKR候補の場合を1とするダミー変数である(PKRとPASが同一選挙区で競合した事例はない)。変数「マレー比×PKR」は「マレー人有権者比率」と「PKR」の交差項である。推計②では、UMNOとPASの競合におけるUMNO候補得票率とマレー人有権者比率の関係(傾き)は β_1 、UMNOとPKRの競合におけるUMNO候補得票率とマレー人有権者比率の関係(同)は $\beta_1 + \delta_2$ となる。また、UMNOとPASの競合における切片は β_0 、UMNOとPKRの競合における

⁴ 棄権・無効率=100-100(有効投票数/有権者数)。

表5 MM'型競合推計結果

従属変数: マレー人と党(UMNO)候補得票率				
独立変数	推計①		推計②	
	2004年	2008年	2004年	2008年
マレー人 有権者比率	-0.2981*** (0.0759)	0.2111** (0.0914)	-0.3542*** (0.0907)	0.1284 (0.1159)
マレー比 × PKR			0.1916 (0.1226)	0.1501 (0.1395)
PKR			-12.5834 (8.7904)	-12.0314 (10.5247)
北部 マレー4州	-11.5345*** (2.3671)	-12.5496*** (2.7947)	-10.9355*** (2.9355)	-12.3629*** (2.8161)
棄権・無効率	-0.2883 (0.2103)	0.2635 (0.3352)	-0.2900 (0.2113)	0.1943 (0.3437)
定数項	99.5387*** (9.1178)	38.2722*** (12.4634)	103.5049*** (10.1587)	46.7187*** (14.4591)
観測数	101	102	101	102
調整済みR ²	0.5182	0.2049	0.5214	0.1996

(注) カッコ内は標準誤差。統計的有意性は***が1%水準、**が5%水準、*が10%水準。UMNO候補とPKRのノン・マレー候補との競合を含む(各3例)。

(出所) 表1・図1記載のデータにもとづき筆者推計。

切片は $\beta_0 + \delta_1$ である⁵。

最小二乗法(OLS)による推計結果を表5にまとめた。変数「マレー人有権者比率」の係数は、推計①では2004年選挙でマイナス、2008年選挙でプラスの値をとり、2004年選挙のそれは1%水準、2008年選挙のそれは5%水準で統計的に有意となっている。推計②では、同じく2004年選挙ではマイナス、2008年選挙ではプラスの値をとるが、2004年選挙の係数が1%水準で有意であるのに対し、2008年選挙の係数は10%水準をも満たさない。以上の結果は、MM'型競合の場合、2004年選挙では異民族有権者の投票が与党の得票率を押し上げたが、2008年選挙ではそのような傾向は失われた(推計②)か、逆に異民族有権者の投票が与党得票率の低下につながった(推計①)ことを示唆する。

推計②における変数「PKR」と「マレー比×PKR」の係数は、2004年選挙と2008年選挙の双方で、どちらも10%有意水準を満たさない。これは、UMNOの対立候補がPASであってもPKRであっても、有権者の与党支持率には変化がないことを意味する。北部マ

レー4州の係数は、推計①と②の双方で、2004年、2008年ともにマイナスの値をとり、1%水準で有意となっている。

マレー人と野党間競合の場合、2004年選挙と2008年選挙の双方で、野党候補がPASかPKRかの相違に由来するUMNO候補得票率の差異はないと考えられるため、推計①の結果を用いて2回の選挙における投票行動の変化の要因について検討する。

まず、現象(a)、(b)、(c)に由来する与党得票率の差、すなわちマレー人ばかりの地域のマレー人有権者が民族混合地域のマレー人有権者より野党を支持する傾向は、2004年と2008年の双方でみられる。ただし、2回の選挙での変化をみると、その差はわずか1ポイントであり、ほとんど変わっていないといえる。

一方、UMNO候補得票率とマレー人有権者比率の関係は、2004年の右肩下がりから2008年には右肩上がりへ変化し、切片(定数項)は大幅に下がった。この変化は、前節で提示したMM'型競合における得票構成モデル、すなわち、

$$Y_{(m)} = 100 - NVo_N - \frac{1}{100}(CV_M + NVo_M - NVo_N)x \dots\dots\dots (2)$$

から、次のように解釈できる。まず切片の大幅な下落は、ノン・マレー有権者の非亀裂型野党支持比率(NVb_N)の急上昇によるものである。右肩下がりから右肩上がりへの傾向の変化の理由は、次の3つが考えられる。(1)ノン・マレー有権者の非亀裂型野党支持比率(NVb_N)が上昇し、マレー人の与党支持率には変化がなかった。(2)ノン・マレー有権者の非亀裂型野党支持比率(NVb_N)が上昇し、かつマレー人有権者の亀裂投票と非亀裂型野党支持を合算した値($CV_M + NVb_M$)が下落、すなわち非亀裂型与党支持比率(NVg_M)が上昇した。(3)マレー人有権者の亀裂投票と非亀裂型野党支持を合算した値($CV_M + NVb_M$)が上昇したが、その効果(直線を右肩下がりにする)を上回る程、ノン・マレー有権者の非亀裂型野党支持比率(NVb_N)が上昇した。

式(2)から、マレー人有権者比率(x)の係数をマイナスからプラスに転換させうる要素はノン・マレー有権者の非亀裂型野党支持比率(NVb_N)の上昇しかないことがわかるが、上記(1)、(2)、(3)のいずれの妥当性が高いかは、ここまでのデータ分析だけでは判断

⁵ 正確には、これは北部4州以外の場合の切片である。北部4州の場合、UMNOとPASの競合における切片は $\beta_0 + \delta_0$ 、UMNOとPKRの競合における切片は $\beta_0 + \delta_0 + \delta_1$ である。

できない。そこで、判断材料を増やすべく、マレー人有権者比率が100%の選挙区における与党得票率の予測値の変化をみている。変数「北部マレー4州」を1、棄権・無効率を20とすると、2004年選挙における与党得票率の予測値は52.43%、2008年選挙のそれは52.10%となり、ほとんど差がない。

ここで式(2)の x に100を代入すると、

$$Y_{(m)} = 100 - (CV_M + NV_{0M}) \dots\dots\dots(5)$$

となる。マレー人有権者比率が100%の選挙区における与党得票率の予測値がほぼ同一であることから、式(5)より、マレー人有権者の亀裂投票と非亀裂型野党支持を合算した値($CV_M + NV_{0M}$)にはほとんど変化がなかったと考えられる。すなわち上記(1)の、ノン・マレー有権者の非亀裂型野党支持比率(NV_{0N})が上昇し、マレー人の与党支持率には変化がなかった、が妥当と推察できる。

(2) ノン・マレー政党間競合における投票行動の検討

次に、MM'型競合のときと同様の手続きでノン・マレー与野党間(NN'型)競合での選挙結果を分析しよう。ノン・マレー与党とPKRとの競合はNM'型競合と考えられるので、まずノン・マレー与党とDAPの競合となった選挙区のみを対象とし、以下の回帰モデルによって分析する。

推計①

$$Y_{(m)} = \beta_0 + \delta_0(\text{ノン・マレー地域}) + \beta_1(\text{マレー人有権者比率}) + \beta_2(\text{棄権・無効率}) + u$$

この回帰モデルは、MM'型競合の推計①のモデルと基本的に同一である。ただし、ノン・マレー人口比が高い地域に固有の効果をコントロールするため、変数「北部マレー4州」にかわり「ノン・マレー地域」を用いる。これは、ペナン州全域と、クアラルンプールとその近郊(クランバレー)、およびペラ州のイポー市近辺の選挙区を1としその他の地域の選挙区を0とするダミー変数である⁶。

ところで、NN'型競合とみなせるのはノン・マレー

与党候補とDAPとの競合だけだろうか。PKRのノン・マレー候補は、ノン・マレー与党候補よりノン・マレー利益の追求に関して急進的な立場をとっていると認識する有権者も多かったかもしれない。そうだとすると、ノン・マレー与党候補とPKRのノン・マレー候補との競合もNN'型競合とみなせる。この点を考慮して、以下の回帰モデルでの推計を行う。推計②

$$Y_{(m)} = \beta_0 + \delta_0(\text{ノン・マレー地域}) + \delta_1(\text{PKR ノン・マレー}) + \beta_1(\text{マレー人有権者比率}) + \delta_2(\text{マレー比} \times \text{PKR ノン・マレー}) + \beta_2(\text{棄権・無効率}) + u$$

変数「PKR ノン・マレー」は、野党候補がDAP候補の場合を0、PKRのノン・マレー候補の場合を1とするダミー変数である⁷。変数「マレー比×PKR ノン・マレー」は「マレー人有権者比率」と「PKR ノン・マレー」の交差項である。推計②では、ノン・マレー与党とDAPの競合におけるノン・マレー与党候補得票率とマレー人有権者比率の関係(傾き)は β_1 、ノン・マレー与党とPKRのノン・マレー候補の競合におけるノン・マレー与党候補得票率とマレー人有権者比率の関係(同)は $\beta_1 + \delta_2$ となる。また、ノン・マレー与党とDAPの競合における切片は β_0 、ノン・マレー与党とPKRのノン・マレー候補の競合における切片は $\beta_0 + \delta_1$ である。

OLSによる推計結果を表6にまとめた。「マレー人有権者比率」の係数は、推計①と推計②ともに、2004年選挙と2008年選挙の双方でプラスの値をとり、1%水準で有意となった。

続いて推計②における「マレー比×PKR ノン・マレー」の係数をみると、2004年選挙と2008年選挙の双方でマイナスの値をとり、5%水準で有意となった。推計②に従えば、ノン・マレー与党とPKRのノン・マレー候補の競合となったケースでは、2004年選挙における「マレー人有権者比率」の係数は $0.8359 - 0.6710 = 0.1649$ 、2008年選挙でのそれは $0.5801 - 0.6957 = -0.1156$ である。

「ノン・マレー地域」の係数は、2004年選挙については推計①と推計②ともに値が小さく統計的に有

⁶ 具体的には、以下の選挙区を「ノン・マレー地域」の選挙区とした。ペナン州全域と Ipoh Timor, Ipoh Barat, Batu Gajah, クアラルンプール全域, Selayang, Pandan, Serdang, Puchong, Kelana Jaya, Petaling Jaya Selatan, Petaling Jaya Utara, Subang, Klang。

⁷ 2004年選挙では、DAP 候補と PKR のノン・マレー候補が同一選挙区で競合した例が3件あるが、これもサンプルに含め、変数「PKR ノン・マレー」では1を振った。

表6 NN'型競合推計結果

従属変数: ノン・マレー人 与党候補得票率				
独立変数	推計①		推計②	
	2004年	2008年	2004年	2008年
マレー人 有権者比率	0.8120*** (0.1390)	0.4983*** (0.1079)	0.8359*** (0.1272)	0.5801*** (0.1021)
マレー比× PKRノン・マレー			-0.6710** (0.2596)	-0.6957** (0.2910)
PKRノン・マレー			22.6593** (10.0596)	26.0336* (13.6099)
ノン・マレー地域	0.8119 (3.9734)	-10.7335*** (3.1588)	1.8351 (3.1786)	-7.2698*** (2.5823)
棄権・無効率	0.2803 (0.3213)	0.1754 (0.2874)	0.1747 (0.3102)	0.4088 (0.2766)
定数項	28.4192*** (12.3661)	28.1078*** (9.9224)	30.4741** (11.5991)	17.5773* (9.1747)
観測数	32	35	43	48
調整済みR ²	0.7260	0.7743	0.6461	0.6979

(注) カッコ内は標準誤差。統計的有意性は***が1%水準、**が5%水準、*が10%水準。
推計②は、2004年選挙でノン・マレー与党とDAP候補に加えPASまたはPKRのマレー人候補が競合した3事例を含まない。

(出所) 表1・図1記載のデータにもとづき筆者推計。

意ではない。一方2008年選挙については、推計①では-10.7%、推計②では-7.3%と大きな値となり、双方が1%有意水準を満たしている。

これらの結果を受けて、ノン・マレー与党とDAPの競合については推計①を、ノン・マレー与党とPKRのノン・マレー候補の競合については推計②を用いて、ノン・マレー与党候補の得票率とマレー人有権者比率の関係の変化を解釈する。推計②における2008年選挙での「PKRノン・マレー」と定数項の統計的有意性は10%水準であり、帰無仮説を棄却するうえで通常用いられる5%水準を満たしていない。しかしここでは、サンプル数の少なさを考慮して、棄却水準として10%を用いることにしたい。

ノン・マレー与党とDAPとの競合においては、2004年選挙と2008年選挙の双方で、「マレー人有権者」比率の係数がプラスになっているが、2008年選挙ではそのサイズが小さくなっている。また、他の条件が一定なら、定数項は2004年選挙と2008年選挙の双方で約28%であり、ほぼ同一とみなせる。このことは、NN'型競合における得票構成モデル、すなわち、

$$Y_{(n)} = 100 - CV_N - NV_{O_N} + \frac{1}{100}(CV_N + NV_{O_N} - NV_{O_M})x \dots\dots\dots(4)$$

から次の様に解釈できる。

切片が同一ということは、2回の選挙の間でノン・マレー有権者の亀裂投票と非亀裂型野党支持を合算した比率($CV_N + NV_{O_N}$)に変化がないということである。一方、傾きは小さくなった。 $(CV_N + NV_{O_N})$ に変化がないにもかかわらず傾きが小さくなったということは、2008年選挙ではマレー人有権者の非亀裂型野党支持比率(NV_{O_M})が上昇したことを示す。

ただし、ノン・マレー人口比が高い地域とそうでない地域の差異に配慮する必要がある。推計①における「ノン・マレー地域」の係数は、ゼロ(無相関)から-10.7335へ変化した。これは、2008年選挙ではノン・マレー地域における与党支持率が大きく下がったことを意味する。この変化が亀裂投票の増大によるものか、非亀裂型野党支持の増大によるものか、双方の増大によるものかは判断できない。

これらの結果を総合すると、ノン・マレー与党とDAPとの競合においては、(1)ペナン、イポー、クランバレーにおけるノン・マレー有権者の亀裂投票比率の上昇、または非亀裂型野党支持比率の上昇、あるいは双方の上昇、(2)マレー人有権者の非亀裂型野党支持比率の全般的な上昇、の結果として、与党得票率の下落が生じたと考えられる。

続いてノン・マレー与党とPKRのノン・マレー候補との競合をみると、「マレー人有権者比率」の係数はプラス(0.1649)からマイナス(-0.1156)へと転化している。また、他の条件が一定なら、切片は2004年選挙については $22.6593 + 30.4741 = 53.1334$ 、2008年選挙については $26.0336 + 17.5773 = 43.6109$ である。すなわち、2008年選挙では切片が下がった。このことは、式(4)から次のように解釈できる。

切片の下落は、2回の選挙の間でノン・マレー有権者の亀裂投票と非亀裂型野党支持を合算した比率($CV_N + NV_{O_N}$)が上昇したことを示す。一方、傾きは正から負へ転化した。 $(CV_N + NV_{O_N})$ が上昇したにもかかわらず傾きが正から負へ転化したということは、2008年選挙ではマレー人有権者の非亀裂型野党支持比率(NV_{O_M})が上昇したことを示す。

ただしここでも、ノン・マレー人口比が高い地域とそうでない地域の差異を考慮する必要がある。推計②における「ノン・マレー地域」の係数は、ゼロ

(無相関)から-7.2698へ変化した。これは、2008年選挙ではノン・マレー地域における与党支持率が下がったことを意味する。

これらの結果を総合すると、ノン・マレー与党とPKRのノン・マレー候補の競合においては、(1)ノン・マレー地域と民族混合地域の双方、とりわけ前者における、ノン・マレー有権者の亀裂投票比率の上昇、または非亀裂型野党支持比率の上昇、あるいは双方の上昇、(2)マレー人有権者の非亀裂型野党支持比率の全般的な上昇、の結果として、与党得票率の下落が生じたと考えられる。

図1-2で示したノン・マレー与党候補得票率とマレー人有権者比率の関係の変化は、以上のような投票行動の変化によって生じたといえよう⁸。

むすび

第1節では、今回の総選挙においてマレー人与党(UMNO)とノン・マレー与党の双方が議席占有率と得票率を大きく下げたことを示した。次いで第2節では、マレーシアにおける投票行動を、(1)亀裂投票、(2)非亀裂投票与党支持、(3)非亀裂投票野党支持、の3種類に類型化したうえで、マレー人与野党間競合とノン・マレー与野党間競合の双方において、この3つの成分とマレー人有権者比率、与野党得票率の関係を示す得票構成モデルを提示した。第3節では、この得票構成モデルを活用して、マレー人与野党間競合とノン・マレー与野党間競合のそれぞれについて、投票行動のどのような変化が与党の得票率の下落につながったのかを示した。この一連の分析により、以下の知見が得られた。

(1) UMNOの得票率の下落は、ノン・マレー有権者の非亀裂型野党支持比率の上昇、すなわち「〇〇人の利益」にかかわると想定される問題以外の何事かを起因とする、ノン・マレー有権者の野党支持の上昇によってもたらされたと考えられる。

⁸ ここが、本稿の見解とフォーラム当日の筆者の発言が矛盾する点である。フォーラムで筆者は、マレー人有権者の与党支持率は前回選挙と比較してさほど下がっていないと主張した。しかし本稿の分析から、ノン・マレー与野党間競合においてはマレー人の与党支持率が低下したのは明らかである。本稿の分析で得られた見解が現時点での筆者の見解である。

(2) ノン・マレー与党の得票率の下落は、①とくにベナン、イポー、クランバレーにおける、ノン・マレー有権者の亀裂投票比率の上昇、または非亀裂型野党支持比率の上昇、あるいは双方の上昇、②マレー人有権者の非亀裂型野党支持比率の全般的な上昇、の結果として生じたと考えられる。

なお本稿が行った分析は、集計データから個人の行動を推定するというものであり、生態的誤謬(ecological fallacy)に陥っている可能性を否定できない。より厳密な分析を行うには、大規模な聞き取りなどにもとづくサーベイ・データが不可欠である。

参考文献

<日本語文献>

- 金子芳樹 [2001] 『マレーシアの政治とエスニシティ——華人政治と国民統合——』晃洋書房。
- 中村正志 [2006] 「分断社会の政治統合——マレーシアにおける連邦議会下院選挙の統合機能」『アジア経済』47巻1号、2-35ページ。
- [2008] 「第12回マレーシア総選挙——華人・インド人に見限られた与党連合——」『アジア研ワールド・トレンド』153号。
- [近刊予定] 「マレーシアにおける投票行動——亀裂投票がもたらす長期的傾向と業績評価投票による変動(仮題)」。
- 山田満 [2000] 『多民族国家マレーシアの国民統合——インド人の周辺化問題』大学教育出版。

<外国語文献>

- Balasubramaniam, Vejai [2006] "Strengthening Ethnic Identity Consciousness and the Role of Tactical Voting in Multi-racial Malaysia," *Asian Ethnicity*, Vol. 7, No. 1, pp. 75-88.
- Crouch, Harold [1982] "Malaysia's 1982 General Election," Research Notes and Discussion Paper No. 34, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies.
- Election Commission Malaysia [2002] *Report of the General Election Malaysian 1999*, Kuala Lumpur: Percetakan Nasional Malaysia Berhad.
- [2006] *Report of the General Election Malaysian 2004*, Kuala Lumpur: Percetakan Nasional Malaysia Berhad.
- Horowitz, Donald L. [1989] "Incentives and Behaviour in

- the Ethnic Politics of Sri Lanka and Malaysia,” *Third World Quarterly*, Vol. 11, No. 4, pp. 18-35.
- Lee Kam Hing and Tan Chee-Beng eds. [2000] *The Chinese in Malaysia*, Shah Alam: Oxford University Press.
- Mohd Aris Hj Othman [1983] *The Dynamics of Malay Identity*, Bangi: Fakulti Sains Kemasyarakatan dan Kemanusiaan, Universiti Kebangsaan Malaysia.
- Ong Kian Ming and Bridget Welsh [2005] “Electoral Delimitation: A Case Study of Kedah,” in Mavis Puthuchearry and Norani Othman eds., *Elections and Democracy in Malaysia*, Bangi: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, pp. 316-345.
- Ratnam, K. J., and R. S. Milne [1967] *The Malaysian Parliamentary Election of 1964*, Singapore: University of Malaya Press.
- Sandhu, Kernial Singh [1969] *Indians in Malaya: Some Aspects of their Immigration and Settlement (1786-1957)*, London: Cambridge University Press.
- Toh Kin Woon [2003] “Machang Bubuk: Changes in Voting Patterns, 1995-99,” in Francis Loh Kok Wah and Johan Saravanamuttu eds., *New politics in Malaysia*, Singapore: Institute of Southeast Asian Studies, pp. 141-157.

<新聞>

New Straits Times

Berita Harian

<ウェブサイト>

マレーシア選挙委員会 (<http://www.spr.gov.my/>)

Star Online (<http://www.thestar.com.my/>)

付録 式(1)~(4)の求め方

式(1)と(2)は以下の手順により求められる。

まず $Y_{(m')}$ を求める。仮定①, ②, ③, ④により,
 $x = 0$ のとき, $Y_{(m')} = NVo_N \dots\dots\dots(1)$
 $x = 100$ のとき, $Y_{(m')} = CV_M + NVo_M$
 $\dots\dots\dots(2)$

となる。

$Y_{(m')} = \beta_0 + \beta_1 x$ とおく。

(1)より, $\beta_0 = NVo_N$

(2)より,

$$100\beta_1 = CV_M + NVo_M - \beta_0 = CV_M + NVo_M - NVo_N$$

ゆえに

$$Y_{(m')} = NVo_N + \frac{1}{100}(CV_M + NVo_M - NVo_N)x$$

となる。

$Y_{(m)} = 100 - Y_{(m')}$ だから,

$$Y_{(m)} = 100 - NVo_N - \frac{1}{100}(CV_M + NVo_M - NVo_N)x$$

となる。

式 (3) と式 (4) は以下の手順で求められる。

まず $Y_{(n')}$ を求める。仮定①, ②, ③, ④により、

$x = 0$ のとき, $Y_{(n')} = CV_N + NVo_N \dots (1)$

$x = 100$ のとき, $Y_{(n')} = NVo_M \dots\dots\dots (2)$

となる。

$Y_{(n')} = \beta_0 + \beta_1 x$ とおく。

(1)より, $\beta_0 = CV_N + NVo_N$

(2)より,

$$100\beta_1 = NVo_M - \beta_0 = \\ -(CV_N + NVo_N - NVo_M)$$

ゆえに

$$Y_{(n')} = CV_N + NVo_N \\ - \frac{1}{100}(CV_N + NVo_N - NVo_M)x$$

となる。

$Y_{(n)} = 100 - Y_{(n')}$ だから、

$$Y_{(n)} = 100 - CV_N - NVo_N \\ + \frac{1}{100}(CV_N + NVo_N - NVo_M)x$$

となる。